

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-6

「紅茶よりはブランデーを飲みたい気分だ」

辰巳は書類を返してよこすと冷めた紅茶を一口飲んで言った。

「妙手はあるでしょうか？」と真紀は訊きながら、辰巳の表情から手の内を読みとろうとした。

「妙手？」と辰巳は繰り返した。

真紀は小さく肯いてから、妙手と言う用語の使用感に懐かしさを覚えていた。

「ないことはないさ。その前に貴女がそこまで入れ込む訳を聞かせてくれないか」と辰巳は至極当然とばかりに言った。

「おっしゃることはごもっともです。お願いする立場で言えた義理ではありませんが、そのところは……」と顔を少し歪めた真紀は言葉を詰まらせた。

「明白！明白！その男は果報者だね。同業者として羨ましい限りだ」と辰巳は周りを気にしながら声を押し殺して囁し立てた。

「すみません」と真紀は指先をこめかみにあてて消え入るような声で言った。

「まあいいさ。貴女の頼みを断れる男がいたらお目にかかりたいもんだ。明日にでも東京支店長に長野行きを命じておくから」と辰巳は言って歯を見せて微笑んだ。

「恩に着ます」と真紀は力を込めて言った。

「11時かー。あと1時間ほどで閉店なのでロビーに行って話の続きをしたいと思うが、時間はあるかな？」と辰巳は腕時計を見ながら訊いた。

「私はもちろんです。辰巳様にはお疲れのところ申し訳ありません」と話し足りないと思っていた真紀は即答した。

オーセンティックな雰囲気の本館ロビーの中2階に移動した真紀と辰巳は、ロビー中央に活けられている様々な菊たちの発する匂いを感じないわけにはいかなかった。

トイレで化粧直しをした真紀が席に戻ってみると、ブランデーが注がれたグラップグラスが2つテーブルに置かれていた。

「オーキッドバーから無理を言って運んでもらった。ナイトキャップのようなもんだ」と辰巳は嬉しそうに笑った。

「菊の匂いをつまみに乾杯！」と辰巳はグラスを掲げた。

「あんなに沢山活けてあっても、程よい匂いですね」と真紀はオークラ・ランタン越しに階下の生け花を目視する。

「桜の季節に来館してほしいね。それは見ものだから！」と辰巳は目を細めて言いながらグラスを傾けた

「ダブル、いやトリプルですね」と真紀はグラップグラスの中身を確認して咎め口調で言ったが、目は笑っていた。

ある種の異空間に、時折エレベーターの開閉する音が聞こえた。